

クラブライフの提案

「ホテルアソシア高山リゾートのリゾートライフ」

目次

歴史背景

高山が街として 400 数十年にわたって持続してきた背景を探ります。

- 1 律令時代に徴用された飛驒の匠 「小京都」好みの金森長近
- 2 越前大野と飛驒高山 農耕はダメだけれど、「山色よろしく」
- 3 飛驒の江戸幕府の直轄領化 高山は町人の街に変貌
- 4 第 12 代代官大原彦四郎の「大原騒動」・第 13 代の大原亀五郎の苛斂誅求
- 5 幕府の補助金行政 「豪商」たちの商い
- 6 旦那衆の勃興とは田畑貯蓄？

01★律令時代に徴用された飛驒の匠

今更日本史でもないのだが、大宝律令の税制は、租はコメの収穫量の3%～10%程度でいわば固定資産税、庸は京での労役ないしその納物、調は絹製品。その庸も調も飛驒に対して免除したが、代わりに、匠を徴用してタダ働きを強いた。

大化 2(646)年の大化の改新で木工寮を置き、飛驒国出身の荒田井直比羅夫を将作大匠に就任させた。また、大宝 3(702)年律令では、例年、50 戸毎に匠 10 人を徴用すると決められた。京での大工仕事に使ったようだが、後の飛驒の匠の嚆矢である。京に上るだけでも大変なことだ。でも、なぜ、飛驒に匠がいたのだろうか。



* 高山工芸を象徴する麒麟台の棟飾

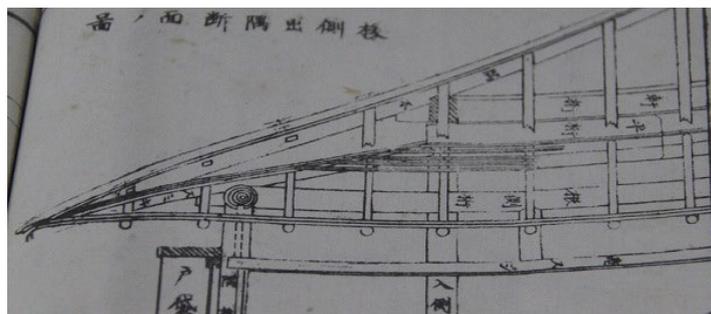
1に飛驒は山国で山林が豊富で「優れた木こりや大工さんがたくさんいた」という。しかし、豊富な山林を持つのは何も飛驒に限ったことではない。

2に何らかの偶然で天才的な匠(たとえば鞍作止利とか荒田井直比羅夫)が飛驒に生まれそして育った。

3に技術優位な人材が海外(たとえば朝鮮半島)から訪れ何らかの理由で飛驒に住み着いた。

4にリーダー役の匠が存在した。かなりあとだが、1311(応長元)年、飛驒匠の藤原宗安が郡上郡長滝の白山長滝寺を建てるとある。宗安は飛驒権守(≒副知事)に任官していた。職方も徐々に優遇され始めたのかもしれない。

大宝律令の700年代、飛驒匠は京の神社仏閣の建築に動員された。タダ働きはさぞ迷惑だったろうが、この徴用で匠のブランドを全国的に確立した。そして徴用から徐々に出稼ぎに発展していく。下々の国飛驒にしてみれば、為替の発達とともに、匠は貴重な「外貨」の送金主になっていったのかもしれない。



* 秘伝の設計図集

02★「小京都」好みの金森長近

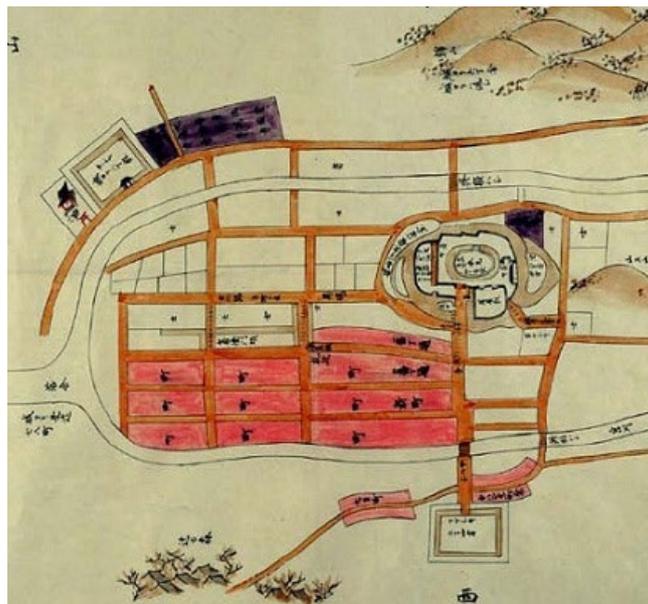
貧しい飛騨の国をそれなりに統治した大名に金森長近がいる。長近は美濃・多治見の生まれ、織田信長の臣、越前の朝倉攻めとその後の越前一向一揆鎮圧で越前・大野郡を攻略、1575年勝利の功により大野郡を統治、柴田勝家旗下となる。82年本能寺の変を経て柴田は豊臣に敗れ滅亡し、以来、金森は豊臣に付く。84年小牧・長久手の戦い、85年佐々成正征伐（飛騨国司姉小路頼綱討は佐々側）の功で越前・大野から飛騨・高山に移封され国持ち大名に、94年には秀吉の御伽衆を務めた。関が原では東軍・徳川方に付いて領地は安堵された。徳川体制では外様である。



福井市から東に約 30 km、電車で 1 時間ほど 乗ると越前大野に着く。大野市は人口 3.5 万人の小都市だがこの街並みも「小京都」と呼ばれる。金森の大野統治はわずか 10 年だが、この間に、城のある 亀山の下にあるいまの街並みの基礎を作ったという。その後の高山の街づくりと併せて、金森は「小京都」好みであったのかもしれない。



* 金森長近による越前大野の絵図(大野市博物館蔵)



* 金森長近による飛騨高山の絵図(高山市蔵)

03★越前大野と飛騨高山

大野市には九頭竜ダム(着手 1962 年・竣工 68 年、総貯水 353・有効貯水 223 各容量百万?)がある。先行した黒部ダム(着手 56 年・竣工 63 年、総貯水 199・有効貯水 148 各容量百万?)は映画や歌や感動的ドラマになったが、九頭竜の方は黒い霧で話題になって石川達三の小説・金環蝕(サンデー毎日に連載・1966)や緒方克行のドキュメント・権力の陰謀(現代史出版会 1976)に描かれ、映画にもなった(75 年)がどうも暗い。地下の金森は何と評しているだろうか。

高山(当時は岐阜県大野郡朝日村)には秋神ダム(着工 49 年・竣工 53 年、総貯水 17・有効貯水 16 各百万?)がある。黒部・九頭竜よりはるかに小さいが、大先輩格で、終戦後の電力不足の解決のため GHQ(連合軍最高司令官総司令部)のお声かがり着工、実はその計画の発端は大東亜戦争に必須の大電力 開発の一端にあった。

水系別に包蔵水力を見ると 2 位の信濃水系をわずかに抜いて木曾水系がトップ、高山を流れる飛騨川(益田川)も木曾水系に含まれる。また、都道府県別に包蔵水力を見ると富山・長野・新潟を抜いて岐阜県がトップだが、未開発が 33%、工事中 256 で、上位 4 県では最も多い。山岳 地帯にとってはやはり重要な資源なのだ。

都道府県名	包蔵水力	既開発	工事中	未開発
岐阜	13,823	9,309	256	4,258
富山	13,012	10,589	11	2,412
長野	12,527	8,998	4	3,525
新潟	12,218	8,801	75	3,342
北海道	10,018	5,756	24	4,238
中略				
沖縄	70	11	2	57
長崎	49	7	0	42
大阪	8	7	0	1
千葉	7	3	0	4
香川	2	0	0	2
合計	61,734	43,481	372	17,881

(注)単位:GWh

出典:<http://www.enecho.meti.go.jp/hydraulic/data/stock/top2.html>

04★農耕はダメだけれど、「山色よろしく」

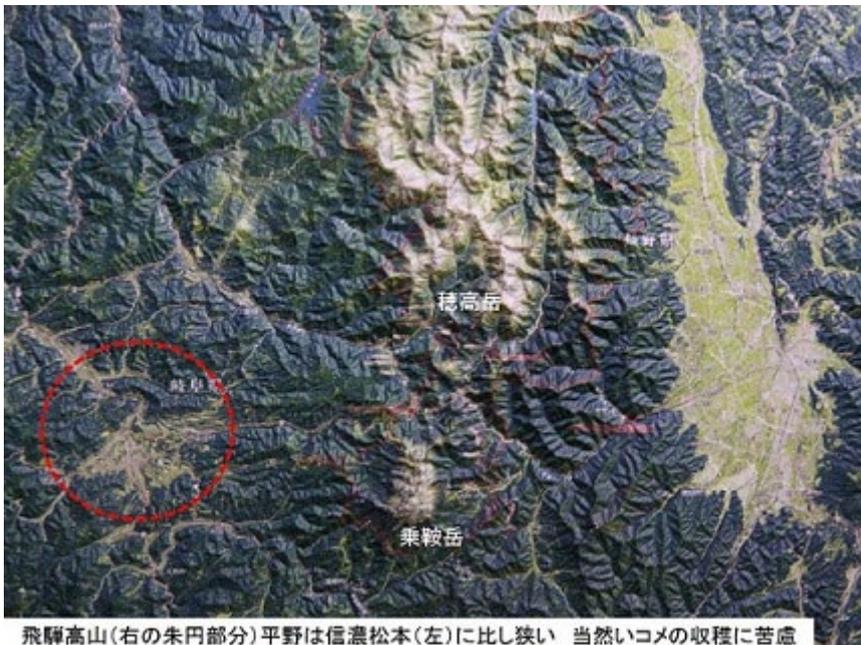
米の収穫を期待できない、地元の産米だけ地元の人口を養えないこの地域を、金森長近はいかにして治めたのか。大江浩「山方買請米制度について」や、菱村正文「江戸時代の飛騨における米国情」などの所見によれば、農耕はダメだけれど、「山色よろしく」で、山林資源・金銀採掘なら可能性があることを、為政者は知っていたようだ。

秋神ダムは、終戦後の朝日村や岐阜県に種々利害の対立を産んだようだが、地下の金森は「ほら見たことか」「小京都高山に大ダムは似合わない」と言ったか、「山色よろしくするには水利が重要」「だから高山がある」と言ったかは興味深いところだ。

金銀採掘は一か八かでリスクが高いが、森林は労力かけて努力した分は報われる。ただし、森林は育林の一方で伐採と輸送が必須で、つまりは労力なしに富は産まれない。農耕で吸収しきれない労働力を森林伐採と輸送に向け、その販売をもって治世の財源にする。金森はその森林経営を一手に独占して、その仕組みを作った。つまり、「元伐制度」を布き、南北各々に伐採の拠点を選んだ。ことに南方は乗鞍・御岳の山麓を含み、ことに「ひのき、さわら、ねず等の良材が無尽蔵と 思われるほどの地帯」であった。

この乗鞍・御岳の西側が信濃の木曾、東側は飛騨の南方となる。余事ながら、木曾も東山道沿いで、高山に負けず劣らず貧しそうな感じがする。京までの距離は、木曾からでも高山からでもそう違いはない。木曾のヒノキで森林業は盛になっていくが、飛騨ほどに匠は出なかった。なぜだろうか。たしかに飛騨に比べたら、まだしも広い平野が信濃にはあり、朝廷は庸・調を免除しなかったゆえか。

ともかく、飛騨の匠が持続したのも、あるいは高山の小京都が成立つのも、この森林から産まれる雇用と消費に拠るところが大きかろうと推定する。



* 飛騨高山(右の朱円)の平野は、松本(図の右)に比狭い。コメの収穫に苦慮した。

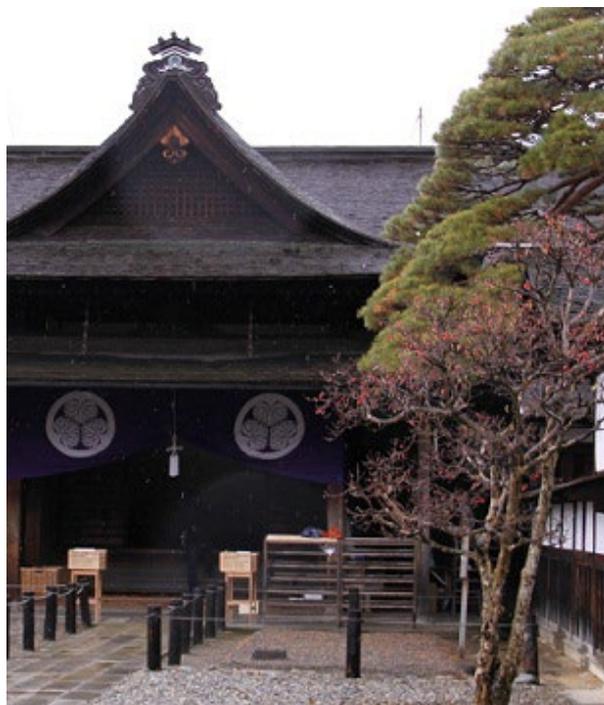
05★飛騨の江戸幕府の直轄領化

ところが、江戸幕府は1692(元禄5)年、飛騨を金森家から取り上げて直轄領(支配所)とした。政治的に重要ならともかく、天下の幕府が何を好んで下々の下の飛騨を欲しがったのか。うがってみれば、幕府は紙幣を使わなかったから、経済成長とともに慢性的財政難になる。それだけに大量の金銀が必要とした。そこで飛騨に着眼した。金森氏から飛騨を取り上げたけれど、しかし、鉱山の方は期待はずれで、第二の佐渡にはならなかった。

森林は豊かだった。その経営は必須である。代官(のちに郡代)を置きこれにあたらせた。しかし江戸から赴任に10日を要する遠隔地、しかも最初の代官の伊奈忠篤は関東郡代であり、飛騨は兼務だった。飛騨担当の専任代官は1715(正徳5)年任命の森山又左衛門からだが、しかし江戸常駐だったから、ときどき高山に来るけれども、原則は江戸にいて、あれをしろ・これをやれと命じていたことになる。これでは現地がうまくやれるとは限

らない。いまふうの「だったらおまえ(O)が、来て(K)、やって (Y)ごらん」的響感を買っていたのかどうか、興味深いところだ。

実際に高山陣屋(代官所)に常駐したのは、1728(享保 13)年の 7 代長谷川庄五郎からである。



* 郡代・陣屋

06★高山は町人の街に変貌

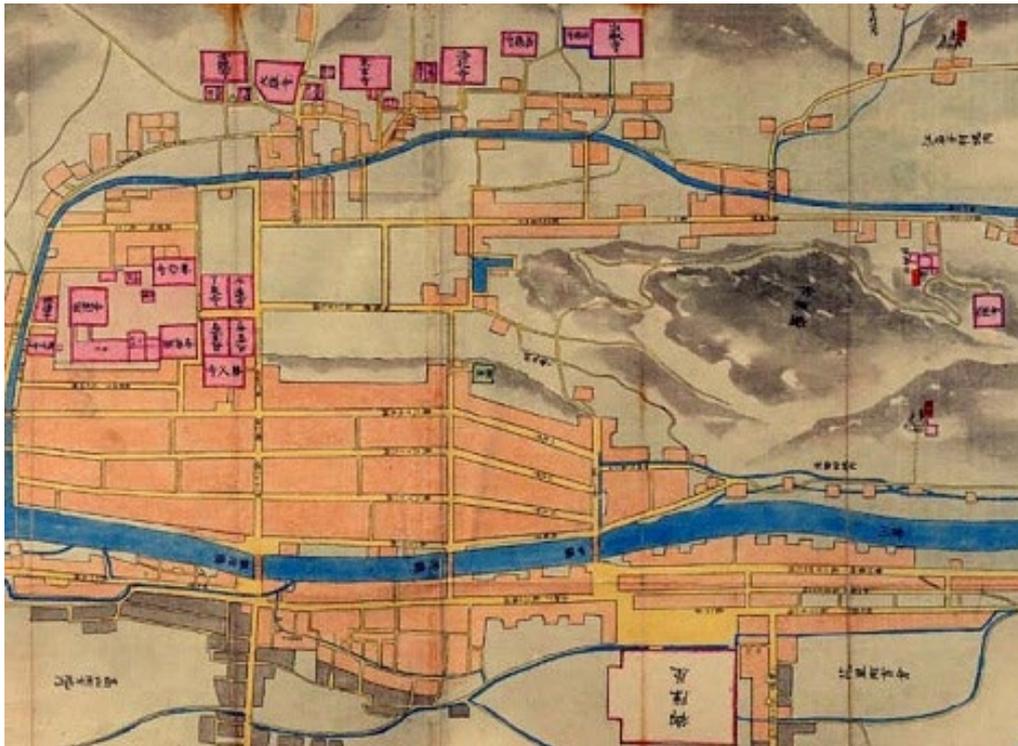
ところで、金森氏が飛騨を外された理由はよく分からない。ときの 5 代金森頼時は奥詰衆(側用人)に任ぜられ、外様としてはエリートコースを歩み出していたが、翌年解任された。その理由も定かではない。一説では、幕府機構でより高位役職に就くため、運動資金を得るべく領民に重税を課し一揆を招いたとか、平素から飲酒が過ぎ、素行が悪く柳沢吉保に嫌われたとか、5 代将軍綱吉と反りが合わなかったなど…と語られる。

それで金森氏は飛騨から 447 キロも北の出羽・上之山に転封、さらにその 5 年後に、こんどは 512 キロ南の美濃・郡上に配置換えになる。その郡上でも子の頼錦の代に、郡上一揆と石徹白騒動を処理できず、結局、1758 (宝暦 8) 年所領没収となった。

仮に金森の領地が表向き 3.5 万石だと、常用雇用の家臣 3-400 名、家族ともども 1-2 千人と推定しよう。基本的に徒歩での引っ越しである。命令とはいえ経費は大名持ち、だからといって、逆らえばおとりつぶし。挙句の果てに所領没収。官僚機構による統治だから、大名もなかなか辛抱がいるものだ。

直轄化の時点で高山は城下町から商人街に変貌する。城は一時的に加賀藩の前田が預かるが、維持にカネがかかりすぎ破却を申請、ほどなく幕命で取り壊された。町の上段にあった武家屋敷は農地になり、下段にあった 3 つの商人町が中心になる。

小京都が江戸を向き始めた。当時は世界的にも大都市だった江戸の文化や情報が伝わる。金森のややっこしい家臣団よりも、代官・郡代を相手にした方が手っ取り早い。この変化は、高山の町づくりに大きな効果があったのではないかと推察される。



* 武家屋敷が消えた高山(高山市藏)

07★第 12 代代官大原彦四郎の「大原騒動」

先の菱村正文によれば、幕府の郡代代官が支配した直轄領は、1716(享保元)年から1726(享保10)年の平均で約412万石(取り米で139万石強)、飛騨における粗米取高は幕府全歳入の1%程度。経費倒れの感なきにしもあらずだ。それにもかかわらず、金森氏なきあとの飛騨に、明治が始まるまでの190年間、代官・郡代合わせて25名が任命された。

狙った金山は当てが外れ、森林経営が目的となるが、江戸から赴任する官僚が、そうそう旨く森林の経営ができるはずもない。代官所は旧金森藩の下級役人を引き取り、結果的には金森流森林経営を引き継いだ。

順々と金森手法に従っていれば事なきを得るはずだったのに、12代代官大原彦四郎のとき「大原騒動」が起きる。1771(明和8)年から18年間に及ぶ大々的な百姓一揆である。事の起こりは、上司である江戸の勘定奉行の命により、地元の山形衆に、御用木元伐の休山命令を出したことによる。休山ということは、従って元伐払下米も中止になる。あてにしていたコメが入手できなくなる。彦四郎にしてみればOKYであったかもしれないのだが、逆に上司の勘定奉行の命に忠実に職務を推進した。

その結果、現金収入というか食糧を閉ざされ、怒った現地住民は江戸に直訴をしたり、一揆をしたり、検地にたてついたりしてさんざん抵抗した。大原はこれを直ちに実力で鎮圧、死罪がでたりしたが、当の大原は一揆鎮圧の功績を認められ、初代郡代に格上げされ、俸禄も400俵(250俵加増)、しかし眼病をわずらい1779年に病死してまった。

江戸時代の飛驒における米穀事情

菱村正文

目次

- 一、産米量と人口
 - (イ) 産米量の推移
 - (ロ) 人口推移
- 二、検地と買租
 - (イ) 金森検地
 - (ロ) 元禄検地
 - (ハ) 買租免率の増減
 - (ニ) 安永検地
- 三、米穀統制
 - (イ) 買租米地元還元と消費割当
 - (ロ) 消費規正
 - (ハ) 国外からの移入
- 四、高山町の米穀市況制度
 - (イ) 払下げ量
 - (ロ) 米株と市売米買加金
- 五、米価変動
 - (イ) 米価政策
 - (ロ) 買米資金

- 六、米騒動
 - (ハ) 米価変動資料
 - (イ) 打毀しと備荒対策
 - (ロ) 検地反対
- 一、産米量と人口

下々の下国と呼ばれた飛驒国は交通不便な僻遠の地であると同時に、産米事情においても国中人口を養う丈の力を持たぬ貧乏たる瘦土の国であった。上代より幕末迄の国中産米事情は次の通りである。

 - (イ) 産米量の推移

(年代)	(産米石高)	(備考)
平安中期	四〇三七五	和名抄
平安末期	四〇三七五	字類抄 和名抄そのまま転載
吉野初期	四〇三七五	拾芥抄 同右
室町初期	四〇三七五	掌中歴 同右
室町後期	四〇三七五	節用集 同右
天正年間	三三〇〇〇	金森長近封領高

〔12〕

08★第13代の大原亀五郎の苛斂誅求

その子の亀五郎が1781年に郡代に就任(初代代官から数えて第13代)し、免職流罪になる89年まで在任する。亀五郎は、どういう動機からか、農民から618両を借上げ、かつ天明飢饉で免除された年貢を私有、さらに近郷の資産家から都合6000両を借上げ、かつ返済しないという愚挙にでた。

たまりかねた領民は死罪覚悟で直訴を繰り返す。ついに、老中松平定信の知るところとなり、亀五郎は免職・八丈島流罪となり、郡代役所の役人や関係者多数が処分された。事態收拾のため、1789年に第14代として飯

塚常之丞政長が郡代に就任、11 年間在任した。名郡代と評される。

彼は、郡代役所の地元採用職員があまりに微禄ゆえに不正に走る。そして大原騒動のもとになるような事件を起こすと見抜いた。職員 84 名中、下から 2 番目のランクで 43 名いた口留役で 6 俵 3 人扶持(元禄 7 年の高山の米相場による菱村の計算だと 8 石相当、年俵 4 両半。乱暴だが 10 kg 5000 円の白米に換算しても、年俵 40 万円 にもならない惨憺たる数字であった。

そこで飯塚は現地役人の給与を引き上げ約 140%から 250%に増額、また、給与体系をいわば職務給とし、本給は一律 25 俵に改めた。その口留役の年俵は 100 万円くらいにはなっただけである。

高山代官所地役人の俸禄

菱村正文

元禄五年、高山藩主金森頼時が幕命によって出羽国上山へ移封され、以後の飛騨は天領になって関東代官(兼任)の治政下に入ったのであるが、当初の代官所吏務要員として採用された地元民は八十四人であった。之等はいづれも金森家臣で移封の際致仕土着した者の内から改めて登傭された微禄の下級藩士である。代官所に就職したと言っても地役人であるから士分の資格はなく俸禄も低い。八十四人の俸禄は次の通りだった。(元禄五申御抱入被仰付候節之役付御扶持給書上—高山御役所御用留)

(役取)	(人数)	(俸 禄)
本メ	七	切米二〇俵三人扶持
山廻役	一	切米一三俵三人扶持
白木改役	五	給金 三兩三人扶持
御樽木改役	一	給金 三兩三人扶持
口留役	四	切米 六俵三人扶持
町在廻役	六	三人扶持

切米や給金が本俸を意味するのに対し、扶持米は加俸手当の性質をもち一人扶持は一日玄米五合に当るので年間では五石五斗弱である。

09★幕府の補助金行政

かくして、やっと事件は収束した。もっと詳細に語ると興味深いのだが割愛して先に進む。亀五郎は論外だが、大原彦四郎の「大原騒動」のとき、幕府は郡代の上申を認め、飛騨に「山方買請米」制度を制定していた。1772 (明和 9) 年に、「南方 48 力村に対し安石代山方買請米として、毎年 8500 俵(3400 石) 払下げの許可が出た」のである。高山の町人宛の「人別買請米」と共に幕末まで継続した。

領民のメリットは、この払い下げの代金が、ときの米相場の平均値(安石代)よりも安いことにある。領民はこの米を相場よりも安く買って、それより米相場どおりに売り、その差額を稼ぐ。これを幕府は黙認していた。

安石代とは、年買代金納の基準として、「美濃の八幡、同苗木、越中の富山、信濃の福島及び飛騨の高山の 5 力所における 10 月 15 日から晦日までの、上中下 一一一段の平均をとって価格をききあわせ決める」ことなのだが、菱村の所見では、「五力所へ聞合せの前に手をうって低い価格に申し立たせたので時価より極めて割安」な価格となる。「大体市価の三分の一乃至は四分の一程度」という。このサヤ(鞘)がどう配分されたかは、菱村の研究をご高覧いただきたい。

いずれにせよ、まさに「一大救恤」、いささか手厚すぎの感もあったので、歴代の郡代は問題視していたようだが、大原騒動で懲りたためか誰も手を付けなかった。どうやら補助金統治であった。たぶん、規則通りに徴税して、それが苛斂誅求と農民に映り、一揆を招いて鎮圧する方にコストをかけるより、適度にカネを配って、山あいで働かせた方が、幕府の財政にプラスと判断したのであろう。

明治維新後、初代知事梅村速水が、この補助金制度を改革しようとして大騒動を引き起こすまで、うまく機能したというべきである。

高山の領民にとって、明治維新はあるいは迷惑だった…、江戸幕府によるいわば「補助金」によって生まれた市民の消費力が、高山の古い町並みを支えていた…のかもしれない。少なくとも、高山の街を持続させた補助金の効果は少なくないように思われる。いかがであろうか。

山方買請米制度について

大江浩

金森財政と山の資源

金森私領時代の財源は主として豊富な山林資源と金銀の探掘による「山色よろしく」と称せられた地下資源並に農業生産物である。国土の面積の九割を占めている山林経営については金森氏は元伐制度を創定し、飛騨に南北二つの元伐場所を定めた。就中南方元伐場所は栗鞍、御岳の山麓地帯の阿多野（今の大野郡高根、朝日の二村と久々野町の一部久須母、柳島、大西、辻、小屋名）と小坂阿郷四十八カ村を南方四十八カ村と称した。この地方の奥地は耕地極めて狭く農耕には適しないが、ひのき、さわら、ねず等の良材が無尽蔵と思われるほどの地帯であるから地元農民は勿論、国内の余剰労働力をもつて伐採運材に従わしめ食糧と賃銀を給したことは食糧事情の貧困な当地には大きな救済事業でもあり、領主金森氏の主要な財源でもあった。

山方買請米の制度の創設

元禄五年、飛騨が御料所になつても、山林政策は一国御林

山として金森氏の方式を大体踏襲し、お救元伐制度も依然として継続されたので、関係百姓はこれに従事したのである。

明和八年、代官大原彦四郎支配の節、飛州御用木御救山稼は五カ年間休山となり、従つて元伐払下米も中止になつた。南方元伐四十八カ村は勿論国内の重要問題であるため、阿多野郷大古井村伝十郎、同中之宿村磯右衛門、小坂郷湯屋村長三郎等は代表となり出府して哀訴嘆願に及んだが効果はなかつた。「食足らず、人余りある国柄」にとつて重大な社会問題のみならず政治問題へと展開され、遂に大原騒動の原因の一つになつたことは周知の事実である。飛騨は一年の半分が降雪と寒冷の関係で農閑期であり、狭隘な耕地には労働力が過剰となる。だから農耕の余暇には「山かせぎ」が一家経済上もつとも重要なものであつた。

元伐休山となり、お救米が廃止になることは飛騨の農村経済機構が破壊され、結論として重大問題化することを察し勘定所に伺いを立て明和九年に南方四十八カ村に対し安石代山方買請米として毎年八千五百俵（三千四百石）を払下げの許可が出た。これが山方買請米の創定で、高山市民へ払下げた

10★「豪商」たちの商い

高山で古い町並みが持続したのは、かつての豪商(あるいは大店)の力量によるところが大きいともいう。しかし、しよせんが「下々の国」であるから、飛驒という地域の経済力だけでは限界がある。高山の「豪商」たちは、どのような商いをしていたのであろうか。

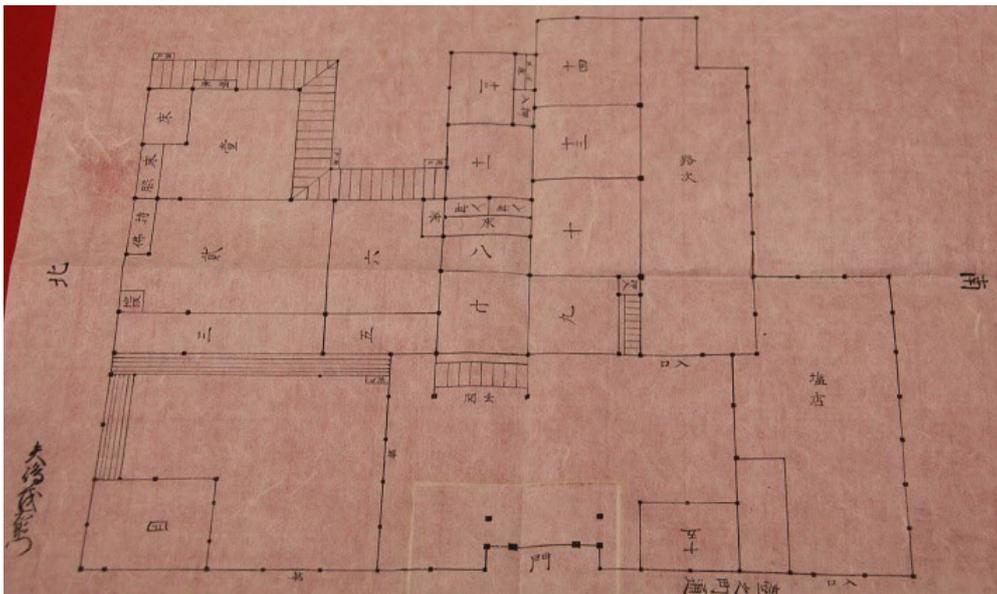
高山では、一之町の矢島家(先祖が金森家と懇意)、二之町の川上家(先祖は金森家家臣)、三之町の屋貝家(先祖は不詳)が代々町役を務め、町を仕切ったようだ。

矢島は阿多野や久々野など金森領内で「材木山稼ぎ」商をしていた。伐採から販売まで一手に商う御用商人であった。ある時期、樽木(クレキ・江戸中期では榎(サワラ)・ヒノキ・鹽地(しおぢ)で割りたてた屋根板のことで失敗し、天井板と白木を扱うようになった。1840(天保11)年に材木商を廃業、塩問屋専門になった。

川上は肴万問屋(さかなよろずとんや)である。1688(貞享5)年免許を受けたとあるから、何らかの商いを独占していたのであろう。万問屋とは、多分、荷受問屋(委託商品を2次問屋・仲買に販売し口銭を得る)であり大問屋を意味する。

屋貝は銀吹所、銀の精錬業者である。管内の鉱山から採れた各種鉱石を精錬し、銀というよりは、主に銅を取り出したほか、内々、銅線などの細工品も製造していた。

以上は、町年寄であるが、これ以外の「豪商」に、永田家(大阪屋)がある。酒の醸造家で、明治維新の時点で、高山最大の地主であったという。



* 大坂屋の屋敷図(高山市博物館蔵)

11★旦那衆の勃興とは田畑貯蓄?

いま1888(明治21)年9月に発刊の『商工技芸飛驒之便覧』に掲載された商人のリストがある。このなかで、矢島姓は高山町の黒鉛山並に製造場の備区人 矢島謙次郎、川上姓は三の町四丁目の塩ならびにしまひる商・御休所の川上喜三二、二之町の魚問屋と内国通運会社高山支店の川上哲太郎、屋貝姓は見当たらず、永田姓は高山電信局前の三星製糸場・三星織工場の永田吉衛門である。姓だけでピックアップするのは乱暴にす

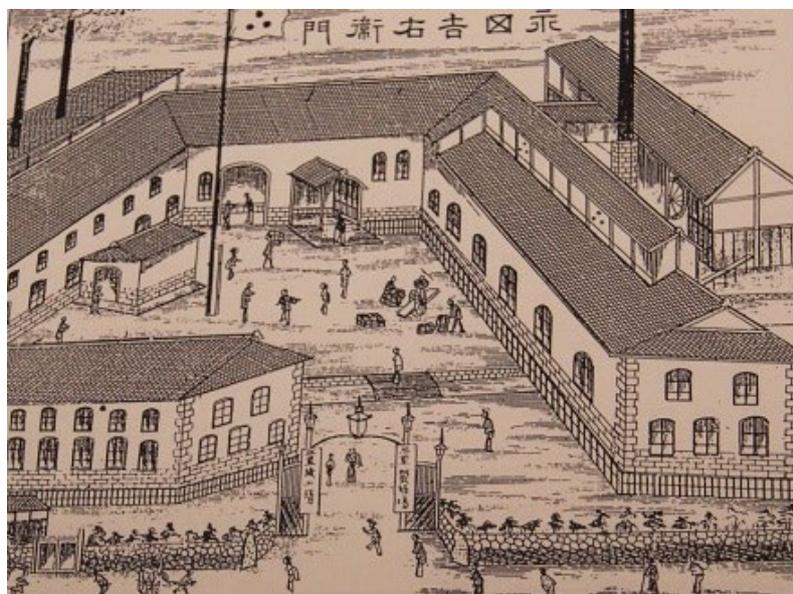
ざるけれども、江戸期の豪商は、明治期には 地主に変身し、商工技芸を営む者は少なかったようだ。

高山の感想を紹介するホームページのなかに「旦那衆の勃興と崩壊」がある。残念ながら著作者不詳なので X としておこう(出典:

http://www7a.biglobe.ne.jp/~fujii/s_dannabokkoutohoukai.html)。

X 説の要旨は、高山豪商サクセスストーリーは、大名貸で儲け、これを田畑に換え(つまりは田畑で貯蓄)、大地主となって明治維新は乗り切ったものの、大東亜 戦争終戦後の農地解放でとどめを刺され、また、材木、鉱山、生糸などの実業に手を出した者は、高いリスクに耐えられず勃興も早かったが没落も早かったというものである。

また、X は、明治維新を生き残った豪商たちが、1947(昭和 22)年の農地解放後 35 年を経てどうなったかを調べ一覧表にしている。それによれば、土地を手放した「豪商」の商いは概ね低調であった。あえて集約するなら、高山の「豪商」は小作の上りをあてにする大地主であった。飛騨も生糸は盛んであったが、固有のリスクを消化して、信州の片倉や丹 波のゲンゼ(郡是)のような規模にはならなかった。それも頷けるところであって、それゆえに高山の町並みが生き残ったのかもしれない。



* 永田家の三ツ星製糸場